

企業が求める英語力とは何か

—ESPとELFの視点から—

寺内一（高千穂大学）

1. はじめに

日本人のビジネスパーソンが国際競争、国際協力で十分に活躍するために英語のコミュニケーション能力はどの程度必要であり、それに対して現実はどうなっているのかという問題意識を起点に、2年半を費やして完成させたアンケート調査結果（以下、「企業が求める英語力調査」）の一部を新たに、English for Specific Purposes（以下、ESP）と English as a Lingua Franca（以下、ELF）の視点を入れ報告した。

2. 調査の概要

本発表は平成16年度～平成19年度科学研究費補助金研究（基盤研究A）「第二言語習得を基盤とする小中高大の連携をはかる英語教育の先導的研究（研究課題番号16202010）」（研究代表者慶應義塾大学・明海大学名誉教授小池生夫）の一部である（詳細は小池生夫（監修）寺内一（編集）高田智子・松井順子・財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(2010).『企業が求める英語力』.朝日出版社を参照のこと）。

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会を共同研究者として迎え総有効回答数7354名を得るというグローバルビジネスの現場で働く人々への実態調査としては、わが国ではおそらくはじめての大規模調査である。彼らのコミュニケーション上の問題点を整理し、日本人の英語コミュニケーション能力の到達する目標を提示することを目標とした。

TOEICの国際比較では、日本人の英語のコミュニケーション能力はTOEICという限られたテストにおいてという条件をつけてではあるが、必ずしも高いレベルにあるとはいえず（小池（監）・寺内（編）(2010)）、大幅に引き上げる必要があると思われるが、実際に、英語を中心とした言語コミュニケーションの面で国際競争に耐えることができるビジネスパーソンを養成するには、日本人全体を対象にした場合、どの程度のレベルの人をどのくらい作り出す必要があるのだろうか。

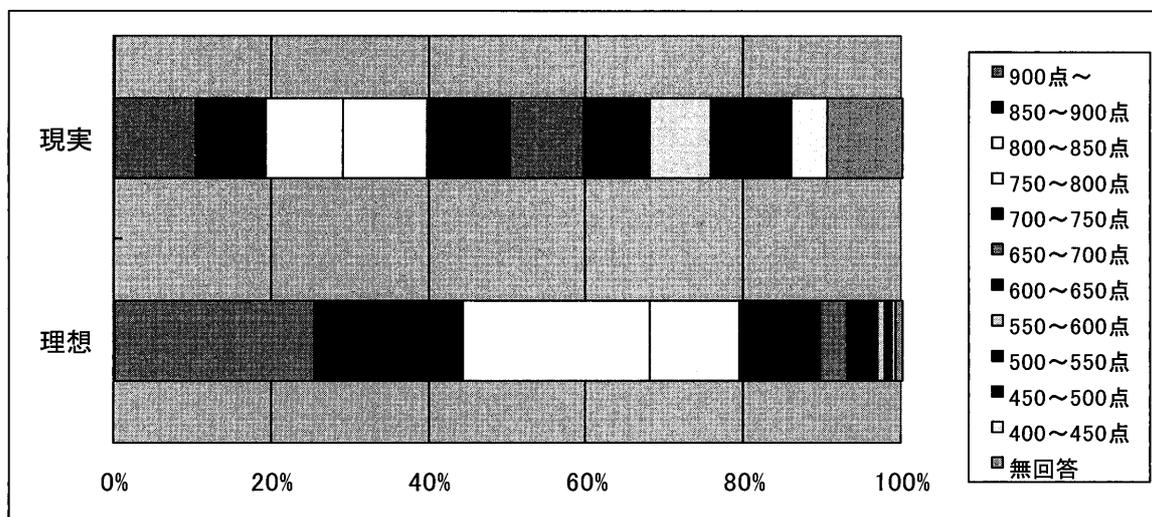
3. 今回の発表のポイント

ポイントを以下の4点に絞ってみた。①現代のビジネスパーソンがグローバルに活躍するのに必要な求められる英語力とは何か？②TOEIC受講者の調査より明らかになった英語力プラスαの能力とは何か？③ビジネス・実社会で有効な英語力を高めるためには英語教育に何が必要か？④次のステップへのヒント：求められる解決策とは？

3.1 現実のTOEICスコアと理想のスコアの差

約7割の回答者が必要な英語力は、TOEIC800点以上必要だと考えているが、実際に800

点以上を取得していたのは3割以下であった。



(高田 2010:49)

3.2 TOEIC 高得点者 (800 点以上) が抱えている不安

シチュエーション	感じる割合
英語力不足で討論についていくのが精一杯で、積極的に貢献できない	45.5%
相手の言うことについて聞き役になっていて、自分の意見を言う前に話の筋道が相手のペースになってしまう	58.0%
日常会話での問題はあまりないが、一旦議論になると相手の言う事に反論し、かつ自分の論を進めることがあまりできない	60.4%
議論中に自分が言いたいことをすぐ言えないうちに、別の外国人に同じ意見を言われてしまって、タイミングを逸して不利な立場に立たされる	49.3%
議論中に話す内容の広さと深さが乏しいために、相手の信頼を得ることができたか不安を感じる	57.5%

こうした不安や不満から、言語能力(linguistic competence)だけではなく、下記の5点も大きく関与している可能性がある。①話者交替のシステム、②ポライトネスの概念を含む語用論的能力、③異文化コミュニケーションに関わる価値観の違い、④社会言語学的な要素、⑤各専門領域と関連する ESP の知識など。

3.3 TOEIC 受験者が考えるビジネスで英語力を高めるために必要なこと

上位順位 (TOEIC)	400 点・500 点	600 点・700 点	800 点・900 点
上位 1 位	日常会話	スピーチ	論理的思考
上位 2 位	日本語		ビジネス
上位 3 位			語彙
下位 2 位	交渉	ビジネス	スピーチ
下位 1 位	論理的思考	語彙	日本語

英語学習方法や英語教育に関しての改善点や要望について調査した結果、高得点者と低得点者が考える有効性が対極的になるとの結果となった。すなわち、①点数の低い層は「日常会話」ができることを重視、②点数が高くなるにつれ「日常会話」と「ビジネスに必要な英語」とは明確に違いがあるという2つの見方である。

3.4 ビジネスで求められる英語力プラス α

英語コミュニケーション能力を多角的（論理的思考）にとらえ、カリキュラム構築や教材開発に反映させることが必要である（寺内・高田 2010）：①ビジネス英語は、専門分野における知識や論理的に話を構成する能力、考えを適切に訴えることのできる能力がなければ通用しない、②きちんとロジックを立てた議論を行なえる能力が必要、③英語以前に日本語で論理的思考をし、文章を書き発言できるような教育を行うべきである。

高度な言語活動に対応できる文法・語彙などの強固な基礎力を育成する（寺内・高田 2010）：①文法のしっかりした基礎がなければ、アカデミックやビジネスの場で使う英語として足りない、②プレゼンテーション能力や交渉能力と並行した英語力、正しい文法と正確な語彙、知性を感じさせる英語力が必要、③英語教育で必要なことは強固な文法・語彙に基づく文章構成能力および理解力である。

ビジネスの現場で求められている英語力とは以下の3点である（寺内・高田 2010）。①「論理的思考」が、英語の学習において重要であるという指摘はどの点数区分でも見られたが、その程度は点数が高い層で非常に多くなっている；②この「論理的思考」に関して、どの点数区分でも「日本語」で「論理的思考」を出来る事がビジネスの現場で求められる英語力に重要な要求と考えている；③日常レベルではなく専門レベルで対応できる言語能力は、抽象思考など認知作業に必要な英語能力であり、それはまず母語で習得できないと英語ができるようにならないと考えているビジネスパーソンが多い。

4. まとめ

ビジネスの現場で求めている日本の英語教育に関する要望は以下の4点である（寺内・高田 2010）。①TOEIC800点以上取得者が必要としているのは、アカデミックな、あるいはビジネスで通用する英語力、つまり仕事力の一要素としての英語力である、②専門レベルで対応できる仕事力としての英語力の基礎は、国語力と考える人が多い、③仕事力の一要素としての英語力に到達した人は、学校教育修了後も自分で勉強を継続したり、実地訓練を活用したりしている、④プレゼンテーション、スピーチ、ディベートなど発信型コミュニケーションを学校教育や企業研修に取り入れてほしい。そのためにはELF（共通語としての英語）という発想が必要でありそれを実践するためにはESPの視点が重要になる。

5. 引用文献

- 高田智子 (2010) 「日本人ビジネスパーソンの英語欲の実態」. 小池生夫 (監修) 寺内一 (編集). 『企業が求める英語力』. 朝日出版社. 39-50 頁.
- 寺内一・高田智子 (2010) 「ビジネスパーソンが要望する日本の英語教育」. 小池生夫 (監修) 寺内一 (編集). 『企業が求める英語力』. 朝日出版社. 93-120 頁.